

近代初頭における京都近郊の景観

——鹿苑寺境内地と大北山村を事例に——

小 林 善 仁

I. はじめに

京都の市街地には、ユネスコの世界遺産に登録された寺院・神社¹⁾を始め、数多くの寺社が存在し、これらは京都という都市の地域的特性の一端を形成している。寺社は信仰の対象としてだけでなく、観光名所としても国内外から大勢の観光客が訪れ、その門前や周囲にこれらの人々を対象とした店舗や関連施設などの集まっている寺社が京都の各地で見られる。他方、大規模な寺社であっても住宅街の中にあり、周囲と共に閑静な空間を作り出しているものも存在する。このように現在の京都における寺社を中心とする地域の景観は一様ではなく、それぞれに差異が認められる。こうした寺社を中心とする地域の差は、現代に限ったことでなく、本稿が対象とする近代初頭の京都についても同様である。

京都の寺院・神社を中心とする地域に関する研究には、近世京都の寺社地を興業地化や市街地形成の点から論じたもの²⁾や特定の寺社を対象に門前町の形成とその変容を論じたもの³⁾などがある。筆者もこれまでに、近代初頭の京都を対象として、市街地外縁部に位置する北野天満宮⁴⁾、西郊の嵯峨にある大覚寺⁵⁾や天龍寺⁶⁾の旧境内地、

1) 平成6(1994)年に、世界文化遺産「古都京都の文化財」の構成資産として、京都市内の13の寺院・神社が登録された。

2) 山近博義「近世後期の京都における寺社境内地の興行地化」人文地理43-5, 1991, 25～45頁。同「近世京都における寺社地と市街地形成」奈良女子大学研究年報37, 1993, 19～36頁。

3) 渡邊秀一「東西本願寺門前町の形成過程と変容」(河村能夫編著『京都の門前町と地域自立』龍谷大学社会科学研究所叢書76, 晃洋書房), 2007, 22～57頁。

4) 小林善仁「北野天満宮の境内図に関する資料的検討—「北野社域図」を事例に—」鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集77, 2013, 19～36頁。

5) 渡邊秀一・木村大輔・小林善仁・藤井暁(2007)「嵯峨諸寺門前地の近代の変容に関する予備的考察」佛教大学アジア宗教文化情報研究所紀要3, 2007, 1～59頁。

6) 小林善仁「山城国葛野郡天龍寺の境内地処分と関係資料」鷹陵史学36, 2010, 1～23頁。同「近

すなわち明治4(1871)年の社寺領上知⁷⁾に始まる境内地処分以前に寺社の「境内」とされた土地⁸⁾の景観復原を行い、近代初頭の寺社に関する諸改革に伴う景観の変化について研究を重ねてきた。当該時期には、神仏判然令の発令とその後の廃仏毀釈の動き、社寺領の上知と境内地の限定ならびに境外地の収公と払い下げ、そして経済的困窮に伴う寺院の廃寺や統合などが相次いで起こり、寺社を取り巻く社会的・経済的環境は激変した。このように、近代初頭という時期は寺社を中心に形成された地域を研究する際に一つの画期と捉えることができ、筆者が研究の対象時期とする理由はこの点にある。

これまでの研究を通して、近代初頭の北野天満宮境内地では神社の周囲に社家(旧社僧)の屋敷が建ち並び、大覚寺では門前路に沿って坊官などの寺侍の屋敷群が見られるなど、寺院や神社に勤仕する人々がそれらを中心に集落を形成していた様子が確認された。また、現在は京都有数の観光地として賑わいを見せる天龍寺の旧境内地では、近代初頭の門前集落の状況と現在の観光地の景観が大きく異なっていることなどが確認され、これら三つの境内地には共通点も見られたが、それぞれに特徴的な景観を見せていたことが明らかになった。つまり、今日の寺院・神社の周囲で見られる観光地や住宅地などの景観は、その大部分が近代以降の様々な変化のなかで形成されてきた結果として存在しているのであり、現在の景観をそのまま過去へと遡らせることはできない。

こうした成果が得られた一方で、筆者の既往の研究には幾つかの課題が残されている。まず北野天満宮境内地は洛中の西側に位置し、京都の市街地と連続しており、大覚寺や天龍寺の境内地の所在する嵯峨は、京都盆地の西端に位置しているため、洛外のなかでも京都の市街地からは離れた位置にある。そのため、京都の市街地の近在にある寺社境内地、取り分け当時の境界とされる御土居や河川の外側に位置する寺社境内地は未検討である。次に、従来の研究では近代初頭に境内地処分の対象とされた寺社境内地を中心に研究を行ってきたが、寺社境内地はそれだけが独立した空間として存在していたわけではなく、周囲には市街地や村落の土地が隣接していたのであり、寺社を中心とする地域の景観を考察する際には、寺社境内地だけでなく関係する周辺

代初頭における天龍寺境内地の景観とその変化」佛教大学歴史学部論集2, 2012, 23～42頁。

7) 内閣官報局編『法令全書』4(明治4年), 原書房, 1974, 5頁。

8) 境内地は、寺院・神社の堂舎や社殿が建ち並ぶ区画と祭典・法要を行う広場や墓地などからなる境内主域と、境内主域に付属する門前集落・耕作地・山林などの境内付属地で構成される空間的広がりを指しており、これらが明治初期の境内地処分の対象とされた。

地域の景観も併せて検討する必要がある。この課題に取り組む際には、景観復原の資料として境内地とその周辺を描いた地図が不可欠となるが、境内地処分関係の地図類は旧境内地の処分過程や結果を記録した地図であるため、それ以上の情報を有していない。そのため、境内地処分の関係資料と可能な限り近い時代の地図資料を併用して景観を復原する必要がある。

以上の課題を踏まえて、本稿では近代初頭における鹿苑寺境内地とその隣接地域である大北山村を対象とする。しかしながら、大北山村という地名は現在使用されていないため、現在の同地域を指す場合には、便宜的に大北山地域と記す。鹿苑寺は、金閣寺の別名で知られ、京都の観光地の中でも清水寺や嵐山と並んで多くの観光客を集めている⁹⁾。他方、鹿苑寺の境界は閑静な住宅街でもあり、観光地や住宅街としての景観は、この地域の近代以降の変化のなかで形成されたものと予想される。そのため、近代の変容が始まる以前、具体的には近代初頭の鹿苑寺境内地と大北山村の景観を復原し、歴史地理学の立場から寺院境内地に加えて隣接する村落の状況を明らかにする。なお、同地域を対象とした既往の研究は、下坂守による鹿苑寺と寺領の概説¹⁰⁾や細川武稔による足利義満の北山第と周辺部の復元的な研究¹¹⁾などがある。これに対して、筆者と同様の関心や歴史地理学の立場からの研究は管見の限り存在しない。

II. 地域概観

(1) 対象地域

大北山地域は、京都市街地の北西部に位置し、地域の東部を紙屋川が北から南へ流れ、西部には大文字山・衣笠山などの山地が広がる(図1)。これらの山地の山麓部にかつての大北山村の大部分が位置した他に、山間の小盆地に原谷(近代初頭まで原之壇)の集落があった。大北山村は、前年の町村制施行を受けて明治22(1889)年に京都府葛野郡の小北山・北野・大將軍・松原・等持院の5ヶ村と合併して衣笠村となり、大北山は衣笠村の大字となった¹²⁾。現在は、山麓部が衣笠を冠した町名(衣笠天神森町など)、山間部の原谷とその東側の大文字山などの山地が大北山を冠した町名(大北山原谷乾町など)であり、鹿苑寺の境内地は単独で金閣寺町となってい

9) 京都市産業観光局観光部観光企画課『京都市観光調査年報 平成22年(2010)』, 2011。

10) 下坂守「鹿苑寺の歴史」(鹿苑寺編『鹿苑寺と西園寺』, 思文閣出版, 2004), 3～15頁。

11) 細川武稔「足利義満の北山新都心構想」中世都市研究15, 山川出版社, 2010, 89～101頁。

12) 京都府立総合資料館編『京都市町村合併史』, 京都府, 1968, 161頁。

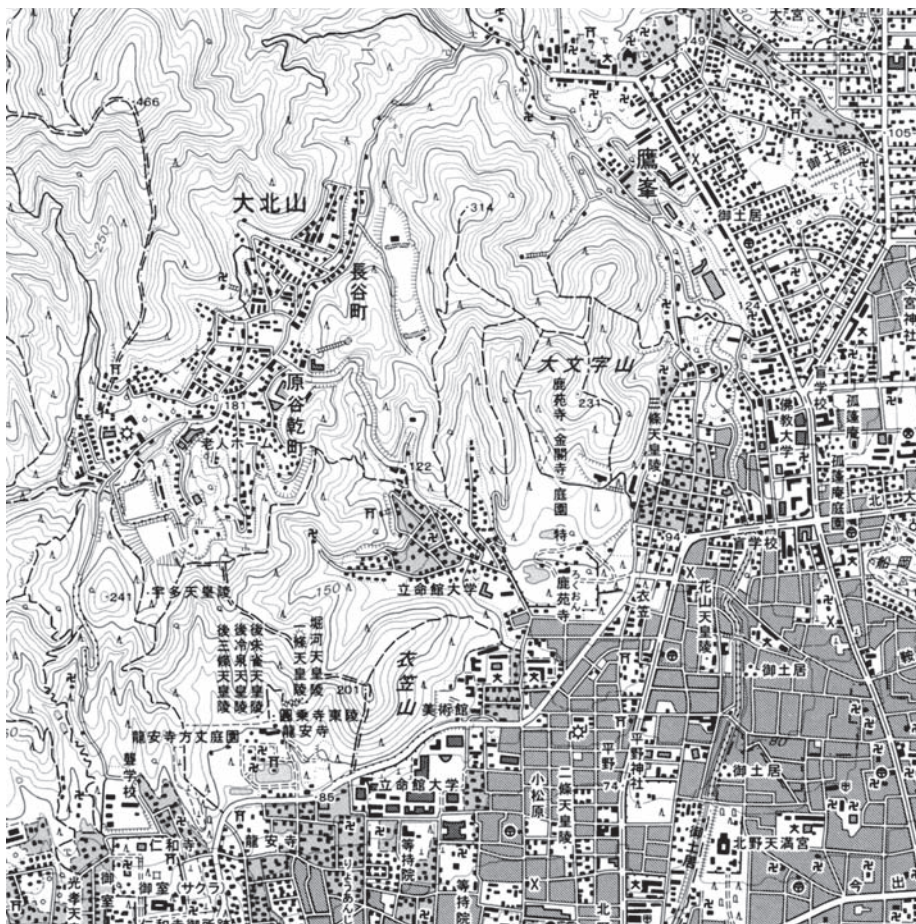


図1. 対象地域

※ 2万5千分1地形図「京都西北部」、平成17(2005)年更新。

る¹³⁾。

京都の北山と言えば、一般には京都市営地下鉄の北山駅周辺や北山通のある京都市街地北部を思い浮かべるだろう。しかしながら、「北山」という地名は、もともと平安京の北方に位置する山々を指し、元仁元(1224)年に藤原公経が衣笠山の山麓に西園寺を中心とする別業を建設してからこの別業とその周辺を指す総称となった。その後、応永4(1397)年に足利義満が西園寺家から同地を譲り受けて義満の邸宅・北山

13) 金閣寺の総門には、「京都市北区金閣寺町壱番地 北山鹿苑寺 通称金閣寺」の表札が掲げられている。

第となり、義満の御所の他に七重大塔や舍利殿（金閣）などの仏教建築が造営された¹⁴⁾。義満の死後、北山第は寺院に改められて鹿苑寺となり、その後、鹿苑寺の東側には集落が形成されていった。このように、北山という地域名は永らく鹿苑寺の位置する衣笠山の山麓部を指し示す広域地名であり、近世の大北山村や隣接した小北山村の村名はこの北山という地域名に由来する。

現在の大北山地域は、臨済宗相国寺派の鹿苑寺¹⁵⁾から東へ伸びる門前路や金閣寺道交差点の周辺と龍安寺・仁和寺方面へ通じる道路に沿って観光客を対象とした土産物店や飲食店などが見られ、鹿苑寺を中心として観光地の景観が形成されている。

このように、大北山地域には鹿苑寺の周囲に観光地の景観が見られる一方で、異なる側面も有している。それは、近代の京都市街地の郊外に成立した住宅地を始まりとする郊外住宅街としての面であり、観光客を対象とする店舗が建ち並ぶ街路から、少し目を移すと区画の整理された閑静な住宅地が広がる。京都有数の観光地であり、かつ郊外住宅地でもあるという二つの側面を併せもつ点が大北山地域の特性の一つであり、これは京都の東山地域や嵯峨・嵐山地域とも共通する。

(2) 明治初年の大北山村と鹿苑寺境内地

前近代の大北山村は、一般に鹿苑寺を中心とする地域と捉えられている。享保初年頃の『京都御役所向大概覚書』の中の「洛外寺社門前境内之事」¹⁶⁾には「北山鹿苑寺門前 大北山村」とあり、洛外の行政を担当した雑色による人別改（人口調査）が行われない地域の一つに挙げられている。これらの地域は、「地子夫役等ハ寺社之面々江相勤候」とあることから寺社に対して税を納めたり課役を負担したりするなど、寺社との結び付きが強い地域と言え、鹿苑寺と門前集落である大北山村の関係の一端が知られる。

しかしながら、近世の大北山村の村高432石余の内訳を見ると、鹿苑寺領298石余、金地院領が90石余、平野社領が43石余であり、大北山村の全域が鹿苑寺の所領ではなく、南禅寺の塔頭である金地院と近隣の平野社との相給であった¹⁷⁾。このように、大北山村は鹿苑寺の一円所領ではないものの、村高の約4分の3を鹿苑寺領が占め、

14) 鹿苑寺編『鹿苑』、1955。

15) 鹿苑寺は、慈照寺と共に臨済宗相国寺派大本山相国寺の境外塔頭の一つである。

16) 岩生成一監修『京都御役所向大概覚書』上巻（清文堂史料叢書5）、清文堂、1973、218・219頁。

17) 木村礎校訂『旧高旧領取調帳』近畿編、近藤出版社、1975、23頁。

年貢はそれぞれの領主に納めるが夫役は鹿苑寺の分を負担した¹⁸⁾とみえ、この点から大北山村が鹿苑寺を中心とする地域であると言える。

大北山村のうち、その集落は鹿苑寺から東へ進み、南へ下って寺之内通を東の紙屋川に架かる高橋へ至る金閣寺道¹⁹⁾に沿って広がっていた。近世後期の寛政2(1790)年に作成された絵図²⁰⁾を見ると、南北に伸びる道路に沿って北から順に上之町・片原町・中之町・下上町・下之町の5町があり、下之町の南の木戸門と高札場を挟んで寺之内通の高橋まで続く。これらの町は、道路の両側に表間口が狭く奥行の広い短冊型の屋敷地が描かれ、いわゆる両側町の形態であったことが分かる。絵図は、集落のみを対象としているため周囲の状況を知ることにはできないが、同時期の洛中洛外絵図²¹⁾では列状の集落の周囲には耕作地が描かれている。この近世後期の集落の状態は、その後の明治初期に至っても大きく変わらなかったと思われる。

近代初頭の大北山村については、『京都府地誌』²²⁾に村の範囲や沿革、人口や生業などの記載が見られる。これによると、村域の東は御土居を境界として愛宕郡東紫竹大門村・同郡西紫竹大門村と接し、西は山林を境界として葛野郡宇多野村と接し、南は耕地の道路を境界として葛野郡小北山村と接し、北は西紫竹大門村千束の南で境を接していた。この大北山村の村域は、現在の大北山地域の範囲と概ね合致する。管轄の沿革は、「明治三年ヨリ京都府ニ隸ス」と記されることから、明治3(1870)年に鹿苑寺の支配を離れ、京都府の管轄下に入ったことが分かる。

大北山村が京都府の管轄となった同じ頃、鹿苑寺でも境内地に関する変化が起きていた。社寺領の上知や境内地の内外を特定する境内地処分である。まず、明治4年1月の太政官布告²³⁾では、寺院・神社が領有していた朱印地・黒印地・除地などがその対象とされ、大北山村や西院村の鹿苑寺領350石が鹿苑寺の支配から離れた。その後、境内地とそれ以外の土地を区別する取り調べが行われ、その結果は地図に記録された。『京都府庁史料』に残る「社寺境内外区別原図」²⁴⁾がそれであり、鹿苑寺の属する葛野

18) 前掲16。

19) 『京都府地誌』葛野郡村誌二(大北山村)、京都府立総合資料館所蔵『京都府庁文書』、明治14～17(1881～85)年。

20) 「御寺領之内大北山村家屋敷表間数改絵図」(『鹿苑寺文書』№515)、寛政2(1790)年。なお、『鹿苑寺文書』については、京都市歴史資料館の紙焼き資料を利用した。

21) 「京都洛中洛外絵図」(大塚隆編『慶長昭和京都地図集成』、柏書房、1994所収)、天明6(1786)年。

22) 前掲19。

23) 前掲7。以下、第1次上地令と記す。

24) 「社寺境内外区別原図」、京都府立総合資料館所蔵『京都府庁史料』明5-47。以下、「原図」と略記する。

郡の「原図」の簿冊には鹿苑寺の絵図が2枚残されている²⁵⁾。この図から第1次上地令に基づく境内外区別の状況が知られる。

2枚のうち1枚には「葛野郡第七区 北山鹿苑寺」、もう1枚には「鹿苑寺元現境内粗絵図」と記され、その記載は類似するものの前者は墨書きと朱書きであるのに対して、後者は川・池・橋などに着色が施されている。両図ともその記載範囲は鹿苑寺の敷地とその周辺であるが、周辺部の描き方は異なっている。前者が第1次上地令に則して境内の範囲を境内主域と墓所のみとし、その範囲を朱線で示しているのに対して、後者は同範囲を橙色の丸印と線で示して、凡例に「元区別」と記している(図2)。それだけではなく、後者の図は朱色の丸印と同色の線を用いて、前者では境外とされた藪・森・荒蕪地を含んで「再区別」の線を引き、朱丸印に1から36までの番号を付している。凡例には、「明治六年七月廿八日 再見分區別 但杭数壹番ヨリ三拾六番終ル」とあることから、明治6(1873)年7月28日の再検査によって鹿苑寺の境内の範囲が境内付属地の一部を含んで広がったことが読み取れる。この結果は、境内付属地の田畑、山林、荒地が上地の対象に加えられ、全般的に境内地の範囲が限定された状況と異なる²⁶⁾のだが、鹿苑寺では前年9月13日に上地された「元除地」(旧境内地)のうち門前の雑木林など境内主域周辺の払下げ²⁷⁾を願い出ており、再検査はこの払下げ希望箇所を含んでいる。このことから、2枚の「原図」のうち前者は第1次上地令に基づく境内地の範囲を示し、その後の鹿苑寺からの願い出を受けて再検査が行われ、拡大した境内の範囲を記録したものが後者と考えられる。

次いで、明治8(1875)年6月29日の「社寺境内外区画取調規則」²⁸⁾では境内を「祭典法要ニ必需ノ場所」に限定し、境内の範囲がより厳密に規定された上で、それ以外の場所は全て境外として上地となり、「社寺境内外区別図」²⁹⁾・「社寺境内外区別図面」³⁰⁾・「社寺境内外区別取調帳」³¹⁾が作成された。第2次上地令に基づく鹿苑寺の境内

25) 前掲24, 鹿苑寺分。

26) 前掲7, 222・223頁。明治4年5月24付太政官達では、「田畑山林ハ勿論譬ヘ不毛ノ土地ニ候共墓所ヲ除クノ外上地」と定め、境内の範囲を限定している。

27) 「地所御払下ケ奉願口上書」(『鹿苑寺文書』No.939), 明治5(1872)年。

28) 内閣官報局編『法令全書』第8巻ノ2, 原書房, 1975, 1666頁。以下, 第2次上地令と記す。

29) 「社寺境内外区別図」, 京都府立総合資料館所蔵『京都府庁史料』明16-48-追3。以下, 「区別図」と略記する。

30) 「社寺境内外区別図面」, 京都府立総合資料館所蔵『京都府庁史料』明16-48-追2。以下, 「区別図面」と略記する。

31) 「社寺境内外区別取調帳」, 京都府立総合資料館所蔵『京都府庁史料』明16-48-追1。以下, 「取調帳」と略記する。

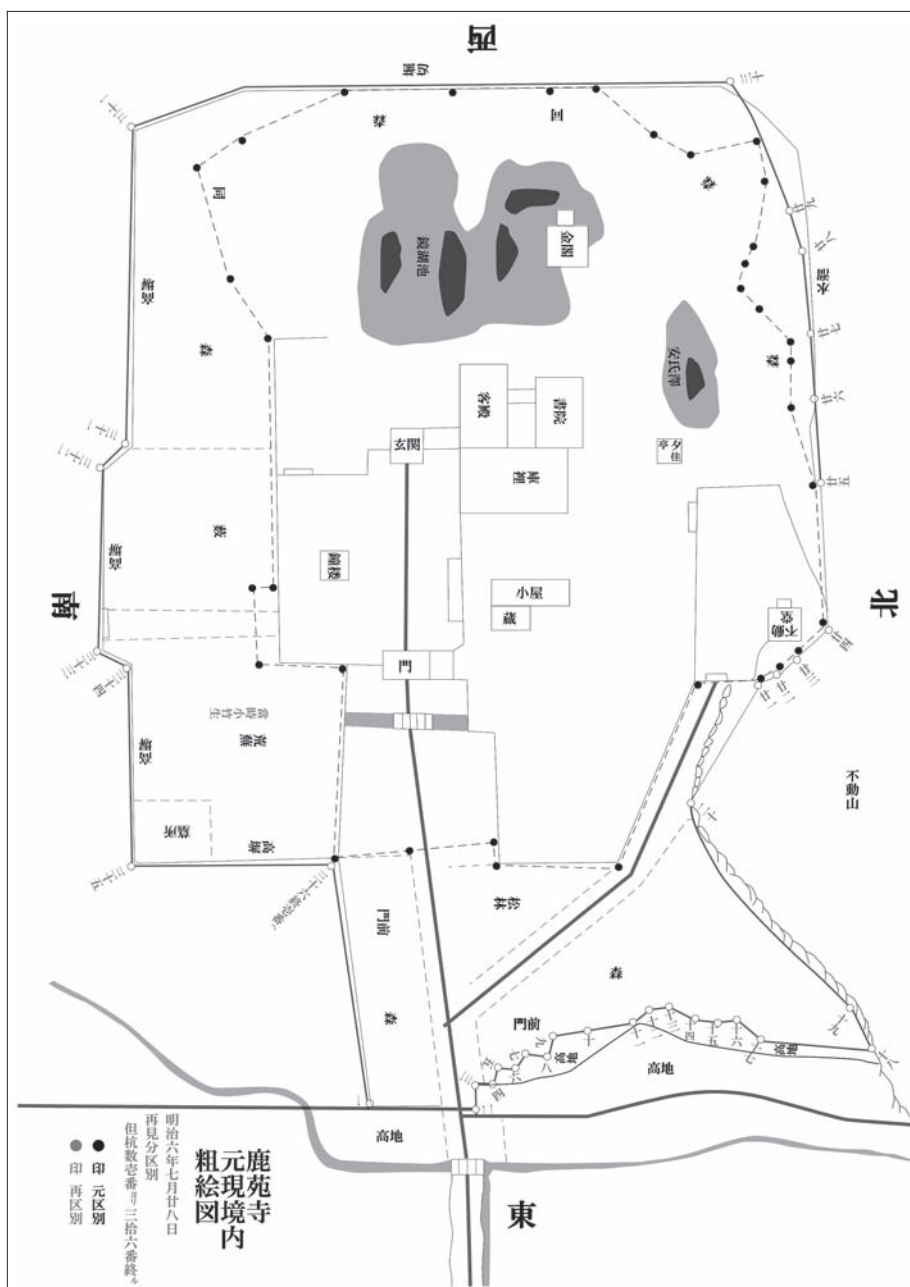


図2. 鹿苑寺境内地の再検査
※「社寺境内外区別原図」より作成。

地処分関係の地図には、「区別図」³²⁾と「区別図面」³³⁾が各1枚残されている。両者を比較してみると、その記載内容は酷似しているものの、後者には図中に凡例が記されているのに対して、前者にはそれが無いなど若干の違いが認められる。このことから、「区別図」は「区別図面」の作成に関係して作成された図面と考えられる。「区別図面」は、境内地処分の結果をまとめた「取調帳」³⁴⁾の添付図面であるため、第2次上地令に基づく新境内の範囲はもとより、旧境内地の状況も他の寺社の「区別図面」と同じく土地利用単位で記載されて着色が施されると共に、「取調帳」の記載と対応するイロハが表記されている。

「区別図面」に描かれた鹿苑寺の旧境内地は、概括すると「現境内」と判断された鹿苑寺の境内主域の他に、大北山村の集落部分、紙屋川沿い、山間部の原谷、大文字山や衣笠山などの山地からなり、「取調帳」によると「旧境内」の総面積は160町3反7畝1歩であり、広大な旧境内地の大部分は136町余の山地が占めていた。このため、境内主域とその周辺のみを描いた「原図」は、「区別図面」の記載から境内地の全域を描いたものではないことが分かる。境内と境外の調査の結果、現境内として境内主域と墓地などからなる7町7反4畝21歩が「存置」とされ、残る152町6反余は境外と判断されて上地となり、実に旧境内地の約95%が処分された(表1)。

表1. 鹿苑寺における境内外区別の結果

| | 面 積 | | | |
|------------|-----|---|---|----|
| | 町 | 反 | 畝 | 歩 |
| 旧境内 | 160 | 3 | 7 | 1 |
| (旧境内上地分内訳) | | | | |
| 現境内 | 7 | 7 | 4 | 21 |
| 墓地 | 0 | 0 | 4 | 21 |
| 屋敷地 | 3 | 5 | 1 | 26 |
| 田地 | 3 | 5 | 8 | 27 |
| 畑地 | 0 | 4 | 9 | 19 |
| 藪地 | 2 | 7 | 4 | 16 |
| 林地 | 4 | 9 | 6 | 13 |
| 荒蕪地 | 0 | 5 | 4 | 25 |
| 山地 | 136 | 7 | 1 | 13 |

※京都府立総合資料館所蔵「社寺境内外区別図面」
鹿苑寺分より作成。

32) 前掲 29, 鹿苑寺分。

33) 前掲 30, 鹿苑寺分。

34) 前掲 31, 鹿苑寺分。

以上の通り、境内地処分の関係資料から鹿苑寺の境内地処分の状況が把握できた。境内地処分の関係資料は、地図資料が僅少な近代初頭の京都にあって寺社を中心とする地域の景観を復原する際に有用な点は筆者の既往の研究で論じてきたが、一方で資料的な限界も有している。それは、境内地処分に關係して作成された地図類の目的が旧境内地の調査や処分結果の記録にあるため、その目的以外の情報が描かれない点である。実際に、鹿苑寺の「区別図面」を見ると、旧境内地に隣接して広がる地域、すなわち大北山村の集落以外の土地の大部分が空白であり、何も描かれていない。このように、旧境内地の外側に広がる地域の景観については、対象外のため境内地処分関係の地図資料から復原することはできない。

Ⅲ. 近代初頭の大北山村を描いた地図

(1) 絵図の検討

前節では、境内地処分関係資料を用いて、鹿苑寺の境内地処分の状況を概観したが、境内地はそれだけが独立して存在する空間ではなく、その周囲には境内地を取り巻く地域が連続していた。そのため、両者は相互に關係しており、一方に生じた何らかの変化は他方にも波及することが予想されることから、両者は一体的に把握する必要がある。しかしながら、境内地処分の諸事業で作成された地図資料は、明治初年の寺社境内地を対象とした地図のため、境内地の景観を復原する際には有用な資料であっても境内地以外の地域は描写の対象外であり、境内地と隣接地域を一体的に復原することはできない。つまり、双方を一体的に復原するためには、境内地だけでなくその周辺も含んで描いた広域の地図が必要なのである。

近代初頭の地域を復原する際、歴史地理学の分野で伝統的に使用されてきた地図資料に地籍図³⁵⁾がある。地籍図は、地券の交付や地租改正などに伴って全国的に作成された地図であり、景観復原の資料として日本史学や考古学など隣接分野でも採用されている。しかしながら、全国的に作成された地図である一方、国家が統一的に作成したものではなく地方が主体となって作成した地図であるため、地図の精度や整備の状況、また残存の状況には地域差が存在している。本稿の対象とする大北山地域を含む現在の京都市域の場合、全域的に残存している地籍図としては、明治10年代の後半

35) 地籍図を利用した歴史地理学の研究には、桑原公徳の研究などがある。桑原公徳『地籍図』、學生社、1976。同編著『歴史地理学と地籍図』、ナカニシヤ出版、1999。

に京都府が地籍編製に関係して作成した『上京地籍図』・『下京地籍図』・『官有地籍図』³⁶⁾が残るものの、作成時期は明治初年に始まる境内地処分などの近代的諸改革が一段落した段階であり、改革に伴う景観変化の状況をこれらの地籍図から読み取ることはできない。

そこで、筆者は近代初頭まで大北山村の領主を務めた鹿苑寺の所蔵する文書（『鹿苑寺文書』）に注目し、当該時期の絵図類の調査を行ったところ、明治6（1873）年8月の年記をもつ絵図³⁷⁾を見出した。裏書には、「明治六酉年八月 大北山村領田畑并ニ家屋鋪山林除地惣絵図 葛野郡第七区 鹿苑寺常住」と記され、図の作成された時期や図題などが分かる。鹿苑寺の「常住」は住持を指すとみられ、作成の主体は鹿苑寺であることが知られるが、図の右下隅には「大北山村住人 永井静翁 書之」と記されていることから、実際の作図は大北山村の永井が担当したと考えられる。しかしながら、裏書と作図の年が必ずしも一致するとは限らないため、即断するには至らない。

一般に絵図は単独で作成されることが少なく、前述の境内地処分の結果を記した「区別図面」と「取調帳」のように文書と対で作成されることが多く、対になる文書を読むことで作成の経緯などを知ることができる。しかしながら、『鹿苑寺文書』の中から関連文書を見出せないため、作成の目的などは不詳である。そこで、記載内容の分析を行い、「惣絵図」の作成目的を考察してみたい。

「惣絵図」（図3）は、図の四方に方位が記され、図の上方が北で下方が南となる。図の東は、紙屋川と概ね並行して「御土居筋」が北から南へ伸び、北東隅の御土居の東側には「鷹ヶ峰」と記されている。御土居の内側では僅かに鞍馬口通の北側に「向の畑」・「鞍馬海道」などと記した区画が見られるのみであり、他は描かれていない。図の西端は、北の大嶽山から南の衣笠山にかけて山の表現が続き、赤坂西谷の西に「尾境 御室領」、衣笠山の西に「西境 龍安寺村支配」・「南境 等持院村支配」と記され、西の山並みが他の地域との境界となっていた様子が知られる。図の南端では、「南」の記載の右上に、「平野御社領」の文字と鳥居形が描かれており、南隣の平野神社までを描いていることが分かる。最後に、北端は「千束村」の記載から鷹ヶ峰の集落の西に位置する千束までを描いている。しかしながら、「鷹ヶ峰」「千束村」や南方の「小北山村」などは文字のみの記載で土地区画は描かれていないことから、位置を示すた

36) 「京都府地籍関連資料」京都府立総合資料館だより 155, 2008, 4・5 頁。

37) 「大北山村領田畑并ニ家屋鋪山林除地惣絵図」（『鹿苑寺文書』No. 766）、明治6（1873）年8月。以下、「惣絵図」と略記する。





図3.「惣絵図」と除地

※「大北山村領田畑背并ニ家屋舗山林除地惣絵図」より作成。田・畑は、図中の地目を記号化して図示した。

めに記載されたと推察される。以上の検討から、「惣絵図」の記載範囲は前述した大北山村の村域と一致していることが分かる。

「惣絵図」には、絵画的に描いた部分と平面的に描いた部分とがある。絵画的な表現の箇所としては、大北山村の西に連なる山地や山際、御土居、それに各所で散見される家形がある。家形は、紙屋川左岸では千束村の南の吟松寺付近、「字向野」に4区画、向野の南の御土居から紙屋川を渡り西へ向かう道沿いで橋の両側に3区画、紙屋川右岸では「大北山村小北山村両村井出」の北側と溜池の南側に水車付きの家形が描かれ、同じ水車の表現は吟松寺の南側の紙屋川に面した家形で見られる。北西部の原之壇では、八幡宮社の社殿とみられる家形と3区画に家形が記され、八幡宮社の他にも山神社や六所³⁸⁾・敷地天神の各神社で社殿を示す家形が描かれている。家形は平野神社の門前路北側でも確認されるが、ここは大北山村の村域から外れている。これに対して、平地部は平面図の表現で描かれ、土地区画を詳細に描いている。土地区画は「区別図面」のような土地利用単位ではなく、そのほとんどが一区画内に地名・番号・地目・反別などを記しているため一筆単位で描かれていることが分かる。また、図の左下隅に他領・御土居・道筋・川溝池・除地・御陵・田畑・山林の凡例が示され、個々の区画には凡例と対応した着色がなされている。気になる点は、凡例の書き方が不自然な点である。それは、多領から順に田畑まで記された次に「等持院村」と記され、その後に山林の凡例が記されている点であり、山林の凡例が追加されたようにも見える。

個々の区画を詳細に観察すると、一区画内の記載には明確な差異が認められ、一様ではないことに気付く。前述の通り、大半の区画は地名・番号・地目・反別を墨書きで記し、これに朱書きの反別記載が書き加えられている。これに対して、番号と地目の記載を欠く区画が主に紙屋川左岸、「大北山村」と書かれた金閣寺道の両側、原之壇、六所である程度のまとまりをもって確認され、なかには「開方」と記すものも見られる。なお、大北山村の集落部分に当たる金閣寺道の両側では人名のみが記され、地名・番号・地目・反別は記されていない。

これらの区画には、記載の差異は認められるものの、一方で共通点が存在する。それは、除地とみられる着色が付されている点である。モノクロの写真版を閲覧したため原図を実見してはいないが、凡例の記載から推察してこれらの区画は除地と考えら

38) 「六所」とある六所社（六所明神社）は、明治6年に敷地神社の境内へ移され、六勝神社と社名を改めている。

れる。その理由は次の通りである。凡例のうち、まず土居・道筋・川溝池・御陵・山林は明らかに場所が違うので選択肢から外れ、田畑についても地目記載の無い区画であることから同じく除外される。残るのは他領と除地であるが、他領は「小北山村支配」「平野御社領」と平野社の東の集落や「平野社家」の区画がこれに当たるため同じく外れ、最後に除地が残る。

同様の着色は、原之壇や鹿苑寺の境内主域などでも見られ、「惣絵図」が鹿苑寺の住持のもとで作成されたことからみて、この除地は鹿苑寺の除地（租税免除地）となろう。この記載を鹿苑寺の境内地処分の結果を記した「区別図面」と比較したところ、「区別図面」に記載された山林を除く鹿苑寺の境内地と除地と着色された範囲が一致した。

以上の通り、「惣絵図」は鹿苑寺の除地に関心を払っていることが窺われ、これらの把握を目的として作成された絵図と推定されるのだが、一方で幾つかの疑問が生じる。それは、「大北山村領田畑并二家屋舗山林除地惣絵図」という図題である。既に大北山村が京都府の管轄となり、第1次上地令により鹿苑寺が認められていた大北山村の寺領が上知されたことから判断して、大北山村全域を指して鹿苑寺領と呼んだとは考えにくい。また、第1次上地令と関係法令により境内付属地の大部分が上地³⁹⁾の対象となっていることから、本図の除地がそのまま明治6年8月時点での除地とは思えず、さらには「惣絵図」が作成される前年からは地券の交付が始まり、地租改正など新たな税制が始まる時期でもある。そのため、かつて鹿苑寺が大北山村の中で認められていた除地を把握する目的で「惣絵図」が作成されたと現時点では推定しておく。

(2) 近代初頭における京都の地籍図と「惣絵図」

「惣絵図」は1筆単位で描かれた詳細な絵図であり、区画内の記載の不統一が無ければ同時期に全国で作成された地籍図と極めて類似している。ここでは近代初頭の京都で作成された地籍図と「惣絵図」を比較することにより、同時代の地図の中での本図の位置付けや資料としての性質を検討する。

地籍図は、一筆ごとに字名・地番・地目・面積などを記載する地図であり、このうち近代初頭の地籍図としては「明治前期作製の地籍図」⁴⁰⁾と呼ばれる4種類の地籍図が知られる。これらの地籍図は、大蔵省が主導した明治5(1872)年の壬申地券交付、

39) 前掲 26。

40) 佐藤甚次郎『明治期作成の地籍図』、古今書院、1988。

翌年からの地租改正、明治18(1885)年からの地押更正調査の各事業において作成され、この他に内務省が主導して行った地籍編製に関係して地籍図が作成された。地籍図の作成は、政府主導ながら実際の作業は各府県の担当であり、そのため4種類の地籍図それぞれの作成時期や記載内容、図としての精度は府県ごとに差異が見られた。これらの「明治前期作製の地籍図」に関する研究は、これまでに市町村や都道府県を単位として行われており、現在の京都府下で作成されたこれらの地籍図については、竹林忠男によって関係する諸事業の展開と共に現存する地籍図の概要が示されている⁴¹⁾。

京都府における「明治前期作製の地籍図」のうち、「惣絵図」の作成された明治6(1873)年以前の地籍図には、明治5年の地券交付に際して作成されたものと翌6年7月から始まる地租改正のものの二つがある。このうち、地租改正に関する地籍図は、壬申地券交付の翌年、明治6年7月に定められた地租改正条例⁴²⁾に基づく改租事業に伴って作成されたのだが、京都府では明治8年8月から郡村宅地を対象とした改租事業を行っている⁴³⁾ことから、「惣絵図」が作成された明治6年8月の時点では、地租改正条例は制定されているものの京都府の改租事業は開始されていないため、同事業での地籍図の作成も行われていない。よって、「惣絵図」を同時期に作成された壬申地券交付に係る地籍図と比較してみる。

京都府下のうち、現在の京都市域とその周辺部に相当する地域で作成された壬申地券の地籍図は、僅かであるが確認されている。このうち、鹿苑寺と同じ葛野郡の東塩小路村の地籍図⁴⁴⁾や乙訓郡今里村の地籍図⁴⁵⁾を見ると、地籍図の記載範囲は1村単位であり、区画1筆ごとに地券と対応する地番、小字名、地目、反別が記載され、凡例を見ると田畑・道・用水・開拓地・藪・墓所が色分けして示されている。なかでも東塩小路村は大北山村と同じ洛中の近郊村落であり、東塩小路村の北に東本願寺の寺内町が広がる関係から図の凡例には「此色 境外上知」とあり、第1次上地令に基づく境内外区別の取り調べで境外と判断された土地が区別して示されている。現存する地券交付の地籍図の記載と「惣絵図」の記載には、1村単位かつ1筆ごとに描かれる点

41) 竹林忠男(1997)「京都府における地租改正ならびに地籍編纂事業(下)」資料館紀要25, 70～144頁。なお、京都府下における地籍図の作成に関しては、竹林の論文による。

42) 内閣官報局編『法令全書』6-1(明治6年), 原書房, 1974, 402頁～421頁。

43) 前掲41。

44) 京都市歴史資料館『若山要助日記下』叢書 京都の史料2, 1998, 口絵部分。

45) 「山城国乙訓郡第四区今里村地形全図」(長岡京市教育委員会『史料が語る今里』長岡京市文化財調査報告書26, 1990, 18・19頁所収), 明治5(1872)年8月。

は共通し、1区画内に小字名・番号・地目・反別を記載する点もまた同様である。しかしながら、先に確認した通り鹿苑寺の除地の部分はこの限りではなく、記載の不統一が見られる。この点が、地籍図としては不備に感じられる点である。

次に作成時期の検討であるが、東塩小路村の地籍図は異筆の括弧書きで明治5年とあり、今里村の地籍図は明治5年8月に作成されている。この他に明治6年に作成された地籍図が乙訓郡で確認されている⁴⁶⁾ことから、「惣絵図」の作成時期はこれらの地籍図とほぼ同時期と言える。地券交付の通達から僅かな間に地籍図の作成が行われたことになるが、これは地籍図の作成に際して新たな測量を行って製図したのではなく、既にある村絵図を利用して作成されたことによる。それでは、「惣絵図」はどのようにして作成されたのであろうか。「惣絵図」の作成に関する文書は存在していないため類推することになるが、他の村落が前年の地券交付の通達を受けて地籍図の作成を行っている例からみて、大北山村でも同様に既存の村絵図をもとに地籍図を作成したものと推察される。これは、図の北端の「千束村」の記載から窺い知れる。千束村は、明治2(1869)年に鷹ヶ峰・一ノ坂などと合併して西紫竹大門村⁴⁷⁾となっており、明治6年8月の時点では既に存在していない地名である。つまり、「千束村」の表記は、近世の村絵図に記載されていた情報がその後の地籍図の段階を経て「惣絵図」に残ったものと思われ、「惣絵図」が村絵図をもとにして作成された大北山村の地籍図を利用したことを裏付ける一つの証と言える。

「惣絵図」が大北山村の地籍図の転用図かどうかは、地籍図の本来の用途である地券との照合によって判明しよう。地券やこれに関係する文書に記載された地番の土地が、実際に「惣絵図」に記載されていれば、もとの図が地籍図であることの証明となる。この点については、大北山村の庄屋を務めた家の所蔵文書に明治8年に作成された地券写帳⁴⁸⁾が現存しており、この中にある明治6年8月までに交付された地券を対象に、地券に記載された小字名・地番・反別が「惣絵図」で確認したところ、大北山村内に所持する19筆のうち2筆で反別の値に違いが見られたものの、残る17筆は一

46) 「上植野村地籍図」(向日市文化資料館『京都府向日市上植野区有文書調査報告書』向日市古文書調査報告書4, 1995, 98頁所収), 明治6(1873)年9月。「山城国乙訓郡第壹区鶏冠井村耕作地絵図面」(向日市文化資料館『京都府向日市鶏冠井区有文書調査報告書』向日市古文書調査報告書1, 1991, 14頁所収), 明治6(1873)年10月。

47) 『京都府地誌』愛宕郡村誌二(西紫竹大門村), 京都府立総合資料館所蔵『京都府庁文書』, 明治14~17(1881~85)年。

48) 「山林地子開方田畑地券写帳」(『北本和彦家文書』G-8), 明治8(1875)年2月。なお、『北本和彦家文書』については、京都市歴史資料館の紙焼き資料を利用した。

致した。このことから、「惣絵図」は既存の大北山村の地籍図を転用して作成されたと判断できる。

しかしながら、地図の作成目的と用途は、本来の地券交付と対応する大北山村内の土地の状況の図化ではなく、鹿苑寺が大北山村内に保持した除地の把握へと変化しているため、地籍図と呼ぶことは適切ではない。ここでは、「惣絵図」を地籍図の関係図と位置付けておく。大北山村のような近代京都の近郊村落における地券交付に係る地籍図は、これまであまり確認されていないことから、こうした点でも「惣絵図」は稀少な資料と評価できよう。

IV. 近代初頭における大北山村の景観

(1) 地図にみる近代初頭の大北山村

現在、大北山村の近代初頭、取り分け明治初期の状況を描いた地籍図は、管見の限り確認されていない。そのため、「惣絵図」は当時の状況を記録する貴重な地図であり、本節ではこの「惣絵図」をもとに当時の大北山村の状況を詳細にみていくが、「惣絵図」には地域を復原する資料として大きく不足している点がある。それは、鹿苑寺の除地部分の地目が記されていない点であり、この部分は土地区画のなかに小字名と反別などが記されるか人名のみが記されているだけで、土地利用の状況を知ることができない。そこで、他の地図資料を用いて「惣絵図」の不足を補うことにする。対象となるのは土地利用を記録した地図であり、同時代か限りなく近い時代に作成された地図資料であることが望ましい。

二つの条件に合致する資料は、鹿苑寺の境内地処分の際して作成された「区別図面」⁴⁹⁾であろう。「区別図面」は1筆ごとの記載をもつ地図ではないが、土地利用単位で記載されており、何より「惣絵図」の地目が不明な箇所は「区別図面」に記載された鹿苑寺の新旧境内地と一致する。これらの点から、鹿苑寺の「区別図面」が「惣絵図」の地目不明な部分を補うに足る地図資料と判断した。しかしながら、「区別図面」は測量図であるのに対して、「惣絵図」は近世の村絵図と同じ概念図であるから、完全に両者が一致することは難しい。そのため、大北山村の集落部分を除いて除地の部分は大まかな土地利用の把握に止まる。

紙屋川左岸地区は、「区別図面」によると古田の辺りが水田であり、八反田の辺り

49) 前掲 30, 鹿苑寺分。



図4. 鹿苑寺新旧境内地の土地利用

※「社寺境内外区別図面」鹿苑寺分より作成。なお、図中の図題並びに境内外区別取調の結果は省略。

では荒蕪地や林, そこから向野までは林と荒蕪地が混在する(図4)。向野は「惣絵図」で家形の描かれた箇所であり, 「区別図面」には概ね対応する位置が宅地であることから, 「惣絵図」の家形が宅地の家屋を表現していることが分かる。これらの家形の周囲には, 畑や林が見られ, これらの少し南を走る東西方向の道より南方は鞍馬口通付近から御土居が紙屋川に沿って描かれているため, これより先に除地は見られない。

紙屋川の右岸は, 大北山村の大半部が位置する場所であり, 便宜的に鹿苑寺から東

へ伸びる鞍馬口通の南北で区切って見ていく。右岸の鞍馬口通以北は、集落の北東部に畑地がまとまって確認される以外は、そのほとんどが田である。田は北部の紙屋川右岸にある小北山村との共同取水口から用水を引き、溜池の北側の分水点から二つに分かれ、個々の田に引水していた。紙屋川からの取水口は、一ノ井・二ノ井の2箇所あり、何れも右岸の耕作地を灌漑していた。

右岸の鞍馬口通以南は、鞍馬口通から南へ伸びる金閣寺道に沿って人名のみが記された短冊形の区画が並ぶ。「区別図面」を見ると、これらの区画は宅地であることが分かる。高橋から鹿苑寺へ通じる道は、近世京都の観光ルートとして知られ、北野天満宮から平野神社あるいは高橋を経て大北山村の集落を抜けて鹿苑寺へ至る巡覧路であったことが知られ、集落はこの道に沿って列状に分布するのだが、集落の北端から鹿苑寺の総門までの間に宅地は確認されず、両者は不連続である。なお、この金閣寺道沿いの集落部分の他に集落と把握される宅地群は「惣絵図」・「区別図面」共に見られない。このことから、現在の鹿苑寺界隈で確認される住宅地の景観の大部分は、近代初頭以降に成立したものとなる。

大北山村の集落の外側には耕作地が広がるが、一面が田である集落西側の耕作地に対して東側では状況が異なり、御陵（花山天皇紙屋川上陵）の周囲やその北側に水田が見られる他は大半が畑であり、紙屋川沿いや寺之内通以南でも畑地が卓越している（図5）。寺之内通の周辺は用水の末端部に当たるため、水がかりの悪いことが予想され、用水沿いの他に畑地の多かったのはこのためとみられる。

大北山村の北西、山間の小盆地には原之壇が位置する。原之壇は、盆地のほぼ中央を紙屋川支流の原谷川が流れており、「惣絵図」を見るとこの川に沿って長方形の区画が記されている。原之壇にも除地の着色がされているため、大まかな土地利用の把握となるが、「区別図面」を見るとこれらの区画は田であることが確認される。なお、北側の谷間や盆地周囲の山沿いは林である。原之壇の南には、「字氷室」とあり、この付近は田であることが知られる。「惣絵図」では原之壇の南に描かれているが、実際には南ではなく南東に当たる。「惣絵図」は、実際には南北に広がる大北山村の領域を縦長の絵図1枚に仕立てているため、山地の部分や原之壇の位置などに歪みをもつ構図であることが原之壇と氷室の位置関係から知られる。なお、氷室の南の氷室溜池の南方、六所の付近も除地であり、「区別図面」によれば林であることが分かる。

絵図や地籍図は、地形の状態を起伏も含めて描く地形図と異なり、地形の状況と地目の関係を読み取ることができない。そこで、明治22（1889）年測量の仮製地形

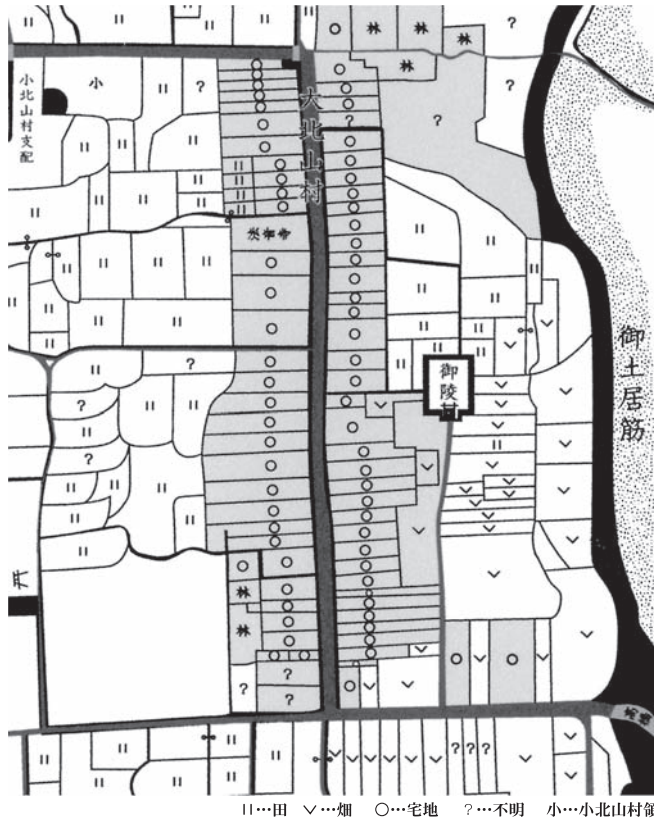


図5. 大北山村の集落と周辺の土地利用

※「惣絵図」をもとに、集落部分の地目記載の無い区画は「区別図面」で補って作成。

図⁵⁰⁾を使用して「惣絵図」に記された大北山村の地目、すなわち土地利用と地形の関係を検討する。大北山地域の地形は、村落西部の山地や原谷の小盆地を除いて概ね紙屋川の形成した段丘である⁵¹⁾。しかし、段丘も一様ではなく、現地を観察すると紙屋川沿いに一段低い面が見られ、上位面との間には明瞭な段丘崖が認められ、この状況は仮製地形図の記載とも一致する。大北山村の大部分は、この段丘の上位面に当たり、土地は北から南へ向けて緩やかに傾斜している。段丘の下位面に相当するのは、概ね紙屋川沿いの地区であり、北の御陵（一条天皇・三条天皇火葬塚）の南側から向野にかけてと、鞍馬口通のやや北側から高橋までの間が周囲に比べて低い土地である。こ

50) 明治22(1889)年測量 仮製2万分1地形図「京都」、陸地測量部。

51) 植村善博「京都の地形分類図と古地理の変遷」地図情報14-4, 1995, 26～30頁。

のうち、向野の付近では紙屋川の川面とあまり比高差が無いため、多量の降水の際には冠水する恐れがあり、土地の条件が良い場所とは言えない。そのため、「区別図面」で確認したこの付近の土地利用は林・荒蕪地・畑地などである。反対に、大北山村の集落は水害の危険性の低い段丘の上位面に展開している。紙屋川の水を用水として利用できる耕作地と、川との比高差が大きくて利用できない耕作地では、自ずからその土地利用が異なり、大北山村では比高差の小さい上流部に取水口を設けて用水を引くことで右岸段丘上の田畑を灌漑した。このように、大北山村のうち山地と山間部を除く地域では、段丘状の地形と対応した土地利用の状況が読み取れる。

除地の地目記載をもたない「惣絵図」と鹿苑寺の新旧境内地のみを記載する「区別図面」、そして土地の起伏や地表面の状況などを描く地形図は、何れも資料としての利点と欠点をもつ。資料の一つ一つがもつ情報を的確に把握し、その資料から記述できることと記述できないことを明確にした上で、研究の資料として利用することが基本である。個々の作成目的や用途によって作成された地図資料を組み合わせるにより、復原される地域の景観はその内容が豊富なものとなり、実在した景観により接近することができよう。

(2) 鹿苑寺の境内地と門前集落

前節では、「惣絵図」・「区別図面」・仮製地形図という性質の異なる3種類の地図を組み合わせて明治初期における大北山村の景観を復原した。しかしながら、前述の通り地図には作成の目的があるため、そこから得られる情報は限られている。そこで、本節では地図以外の資料も用いて、鹿苑寺の境内地と門前集落に位置付けられる大北山村の集落の状況をみていく。

前近代の境内地は、寺院・神社の境内主域とこれに続く境内付属地であり、近代初頭の境内地処分の対象となったことは前述の通りである。このうち境内付属地は、境内の山林・田畑・宅地など⁵²⁾であるが、「付属」の語が示すように境内主域に隣接または連続して位置したかに思われる。この点を鹿苑寺境内地で検討する。

明治初期に行われた境内地処分の対象となった境内地の範囲は、「区別図面」に描かれた範囲である。これを見ると、鹿苑寺の境内地は、山間地の原之壇や川向こうの紙屋川左岸を含んでおり、境内主域はもとより他の境内付属地とも隔絶した場所に位置している。これらの地は、何故、境内地として扱われたのだろうか。両者のうち原

52) 大蔵省管財局編『社寺境内地処分誌』、大蔵財務協会、1954、32頁。

之壇は、慶安3（1650）年に鹿苑寺が開墾した土地⁵³⁾であり、向野などの紙屋川左岸の御土居西側の土地についても享和3（1803）年の文書⁵⁴⁾の「鹿苑寺新開」に原之壇に次いで「向野八反田分」と記されることから、何れも鹿苑寺が新田開発した土地であることが知られる。境内地と対応する区画の中には、開墾地を指すと思われる「開方」の記載をもつ区画も見られる。

このことから、寺院が開墾した土地も境内地に含まれ、例えば境内主域と隔絶する位置にあっても境内地として扱われ、境内付属地は必ずしも空間的に境内主域と連続するとは限らなかったことが知られる。しかしながら、これらの開墾地も内外区別の調査を通じて境外と判断されることとなり、収公された後に一般へ払い下げられ、民有地となって以後は鹿苑寺から離れて自由な開発が行われることとなった。

次に、門前集落の大北山村の集落である。地名辞典⁵⁵⁾などでは、門前町が形成されて町家が建ち並び、上・中・下の町立てもあり、賑わいを見せていたと記され、前に確認した通り寛政2（1790）年の段階で集落は上之町・片原町・中之町・下上町・下之町の5町で構成され、鹿苑寺の諸役を負担していた。

一般に、門前町とは、寺院や神社の門前に発達した集落で、境内やその周辺が町場化したもの⁵⁶⁾とされるが、町であることを議論する際には住民の生業を確認する必要がある。大北山村の集落が、鹿苑寺の門前の位置に形成された集落であることは疑いようもなく、集落内が町を称していたことも確かなことであるが、鹿苑寺の参詣路である金閣寺道を往来する人々、取り分け参詣者を対象として生業を営む人々の居住地であるか否かは、別に検討しなければならない。

そこで、近代初頭に作成された『京都府地誌』⁵⁷⁾を資料として、大北山村の住民構成を確認してみる（表2）。『京都府地誌』によると、大北山村には83戸あり、このうち寺院・神社を除くと79戸となり、内訳は華族1戸、士族2戸、平民76戸である。この平民の生業が問題となるが、民業の項目を見ると男女とも農業や林業に従事する者が半数以上を占め、この他では織機業・牛馬売買業・水車業・雑業出稼の者が若干名であり、鹿苑寺を参詣する人々を対象として生業を営んだ者は確認されない。物産の項目には、菜種・栗子・柴・鶏卵が挙げられ、「皆京都ニ輸送ス」と記されること

53) 赤松俊秀校註『隔蓑記』第2、鹿苑寺、1959、638頁。

54) 京都市編『史料 京都の歴史6 北区』、平凡社、1993、325頁～326頁。

55) 角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典』26 京都府上巻、角川書店、1982、258頁。

56) 藤岡謙二郎・山崎謹哉・足利健亮編『日本歴史地理用語辞典』、柏書房、1981、533・534頁。

57) 前掲19。

表 2. 『京都府地誌』にみる近代初頭の大北山村

| | | |
|----|-------------------|---------------|
| 人数 | 男 | 199 口 |
| | 女 | 234 口 |
| | 総計 | 433 口 |
| | 他出寄留平民男 7 人、女 4 人 | |
| 物産 | 菜種 | 96 石 |
| | 栗子 | 10 石 |
| | 柴 | 24400 束 |
| | 鶏卵 | 2000 箇 |
| 民業 | 男 | 農業 40 戸 |
| | | 采樵業 12 戸 |
| | | 山獵業 3 戸 |
| | | 織機業 1 戸 |
| | | 牛馬売買業 2 戸 |
| | | 水車業 3 戸 |
| | | 雑業出稼 15 戸 |
| | 女 | 農ヲ事トスル者 127 人 |
| | | 采樵ヲ事トスル者 34 人 |
| | | 織機ヲ事トスル者 2 人 |
| | | 雑業出稼 45 人 |

※『京都府地誌』葛野郡村誌 2 大北山村より作成。

から、これらの産物は京都へ運ばれていたことが分かる。生産物については、門前集落の一つである中之町の明治 10（1877）年の調書⁵⁸⁾が残されており、中之町の生産物として米・麦から鳥・馬まで農畜産物が 22 品目挙げられている。

以上のように、鹿苑寺の門前町とされた大北山村の集落は、「町」と呼ばれた集落ではあっても、その実態は農村と考えられ、寺院や神社の門前に位置して行政的に「町」と把握された集落でも、無条件に都市的な意味での町場と捉えることはできない。加えて寺社の参詣者を対象とした生業を営む人々の居住地とも限らないため、これらの点は個別に十分な検討を行う必要がある。この問題は、何も鹿苑寺の門前に限った話ではなく、京都における他の寺社の門前、さらには日本全国の門前町にも通じる点と考える。

注目されるのは、隣接する京都との関係である。物産の項で見た通り、大北山村の

58) 「中之町産物高調書写」（『渡辺保夫家文書』No. 24），明治 10（1877）年 12 月。なお、『渡辺保夫家文書』については、京都市歴史資料館の紙焼き資料を利用した。

物産は京都へ輸送されており、民業の項の雑業出稼についても、その出稼先としては、第一に京都の市街地が予想される。これらの点からみて、大北山村は京都の近郊に位置し、密接に京都と結び付く近郊村落でもあったと考えられる。

V. おわりに

本稿では、観光地と住宅地の景観を呈す京都の寺院を中心とする地域について、これらの景観が近代以降に形成された京都西郊に位置する嵯峨の寺院境内地の事例に基づき、鹿苑寺とその周辺地域を対象として近代初頭の景観を地図資料から復原し、その上で寺院の境内地と隣接する村落の状況を併せて検討してきた。得られた知見は、以下の通りである。

近代初頭の京都西郊には、鹿苑寺境内地と大北山村があり、このうち鹿苑寺境内地は山地を含んで160町余の広大なものであったが、境内地処分の関係資料を通じて7町7反余の境内を残して、他は全て境外として上地された。境内地処分の関係資料に含まれる地図は、処分された鹿苑寺の境内地のみを描くものであったため、境内地に隣接する大北山村も描く地図を鹿苑寺の文書で検索したところ、明治6年8月の年記をもつ「惣絵図」が見出され、分析の結果、「惣絵図」は同時代に作成された壬申地券の交付に係る地籍図と共通する点を多くもつことが判明し、地籍図の関係図と位置付けられた。この「惣絵図」と境内地処分関係資料の「区別図面」の併用によって明らかになった近代初頭の鹿苑寺境内地と大北山村の状況は、鹿苑寺の門前に位置する集落部分の他は西部の山地を除いて大半が耕作地であり、これらの耕作地を地形との関わりから検討した結果、紙屋川上流の取水口から用水を引いた段丘上部は大部分が田であり、川沿いの不安定な土地条件にある段丘下部や水がかりの悪い土地などでは畑や荒蕪地であった。なお、大北山村の集落は金閣寺道に沿った集落以外には、宅地が原之壇や向野などで僅かに見られるだけであり、現在のような鹿苑寺境界で見られる住宅地の景観は近代以降に形成されたものであることが確認された。この点は、観光地の景観についても同様と考えられる。

最後に、鹿苑寺の境内地と門前の集落の状況を検討したところ、鹿苑寺の境内地は境内主域と連続する位置に無い山間地の原之壇や紙屋川左岸の向野などを含んでおり、これらの土地が近世に鹿苑寺が新田開発した土地であることから、これらの土地も境内地として扱われ、境内地処分の対象とされた。また、鹿苑寺の門前町と評価される大北山村の集落についても、住民の生業の面から町であるか否かを検討した結果、

住民の主たる生業は農業や林業などであり、生産された農産物などは京都へ輸送されていた。大北山村の門前集落は鹿苑寺の門前に位置し、近世は鹿苑寺の諸役を負担した集落である点は疑いないが、その実態は農村と捉える方が適切であり、近郊農村の一つとして京都と関わっていたものと結論付けられる。

本稿では、境内地処分関係の地図資料や「惣絵図」など様々な性質の地図を使用して、近代初頭の鹿苑寺境内地と大北山村の景観を復元的に考察してきた。それぞれの地図資料のもつ情報量は、目的の違いもあって限定的であり、これらの地図資料を複合的に使用することで、復原される地域の景観の内容はより豊富ものとなるだろう。無論、地図から読み取れる情報には限界があり、読み取れない点を地図から飛躍させるのではなく、同時代の文書などで補うことが基本であることは言うまでもない。

同時期の京都では、境内地処分の関係資料や「惣絵図」の他にも、京都の市街地や近在の村落などで用途に応じた様々な地図が作成されている。同時代の地図に関する研究が進むことで、「惣絵図」の位置付けもより明確になるだろうし、性質の異なる地図それぞれの利点と欠点を精査し、その利点を組み合わせることでより詳細な地域の景観復原が可能になるだろう。鹿苑寺と大北山村のように、寺院・神社を中心に形成された地域は京都に数多く存在しているが、未検討な問題が多く不明な点が残されている。これらの地域を研究する上でも、既知の地図の研究を深化させることが専一であり、これを資料に地域の景観が大きく変化した近代の景観を復原し、考察することを今後の課題とする。

【付記】

本稿の作成にあたり、史料の閲覧に際しては京都市歴史資料館・京都府立総合資料館のお世話になり、佛教大学の渡邊秀一先生を始め、研究班の皆様からは貴重なご指摘・ご助言を頂きました。なお、作図についてはMAP7の浅子里絵氏・進藤美奈氏にご助力頂きました。ここに記して御礼を申し上げます。

(コバヤシ ヨシト 嘱託研究員)